

大学における文章表現教育の試み

木戸 光子

要 旨

本稿では、筆者が過去に担当した文章表現の授業のうち、留学生対象の授業3つと日本人学生対象の授業1つについて報告する。近年、日本人学生に関して大学での勉学を支えるレポート作成等の文章表現力が不足しているという事実が指摘されている。そのため、留学生だけでなく日本人学生にも文章表現の授業が必要になってきている。留学生も日本人学生も大学で要求される文章表現は同じであり、文章表現を教える際にも両者には共通点がある。さらに、大学での勉学を支える文章表現を学ぶための教育の改善について提案する。

【キーワード】 文章表現力 大学生の日本語力 留学生の作文

Teaching Japanese Writing to Foreign Students and Japanese Students at University Level

Kido, Mitsuko

Recent acknowledgement that Japanese students lack academic writing skills has led to the development of Japanese academic writing courses for Japanese students as well as for foreign students at Japanese universities. In this paper I report on my experiences over the past six years teaching three courses on Japanese writing for foreign students and a course on Japanese rhetoric for Japanese undergraduate students at university level. In particular, I stress the importance of having the same rhetorical objectives in courses for foreign students as for Japanese students when teaching these academic skills. I also discuss ways of improving the academic writing curriculum.

1. はじめに

本稿では、文章表現を学ぶ、という観点から、留学生や学部生(主に日本人学生)対象の授業で筆者が過去に行ってきた文章表現に関わる授業の概要を報告する。それらの授業を踏まえ、大学での文章表現教育の問題点を指摘する。さらに、留学生の日本語教育という枠にとらわれず、広く大学での勉学に必要な文章表現力を養う教育として「作文」の授業を見直すことの必要性を述べる。

大学において文章表現を学べる授業は、対象によって受講できる科目が異なっている。例えば、現在、筑波大学では、日本語・日本事情科目の「日本語作文」は、その対象は学部正規生⁽¹⁾である留学生、帰国子女枠で入学した日本人学生、約1年の短期留学生である。開講されるのは全学対象である。補講コースの「作文」は、対象は留学生のみで、学部生・大学院生、正規生・研究生や短期留学生を問わず留学生なら受講できる。一方、学部の「国語」は学部正規生が対象で、日本人学生や留学生や帰国子女の日本人学生が受講できる。

留学生対象の授業の場合、レポート作成や論文作成など、大学での勉学に要求される文章表現力が不足していることを踏まえて、文章表現指導がなされることが多い。一方、大学では、ここ数年日本人学生の学力や文章表現力低下の危機感が新聞等で取り上げられて、学力低下に対しては補習授業を行う大学も出てきたという。

現実には、大学での勉学に必要な文章表現力を養うという目標は、留学生でも日本人学生でも同じである。すなわち、文章表現力の不足は、留学生あるいは帰国子女特有の問題ではなく、日本人学生にも共通する問題となってきたと言える。

2. 留学生・日本人学生に共通する問題

留学生も日本人学生も、作文や言語表現の科目でなくても、一般科目や専門科目でも結果として文章表現を学んでいる。授業では、学期末レポート、講義や演習の課題を短くまとめたレポート、発表資料など、学習の過程で文章を書くことを要求されることが多い。学生は一般科目や専門科目を学ぶことを通して、先輩や同級生との情報交換等を経て、必要な文章表現を学んでいる場合もある。

日本語教育においては、専門志向の強い学生、特に研究生や大学院生のニーズに直接応えるため、ここ数年「専門日本語」「科学技術日本語」等の名称で大学の専門の授業に直接つながる日本語学習の工夫が行われている。

しかし、「専門日本語」の必要性を強調しすぎると、内容が文章表現かの二分法に陥り、日本語教師は日本語と理科系などの専門も必要だとの主張もでてくる。学部学生に日本語学を一般科目、専門科目として教えた経験から言うと、専門の内容以前に、「日本語」を中心に文章の書き方をもっと学んでほしいと思うことがある。例えば、調査や分析、考察の説明の日本語が意味不明で何を言いたいのかわからない場合、学生の日本語力の不足を感じる。これは、留学生も日本人学生も同じで、留学生だと文法や語の運用のまちがいが目立ち、日本人学生だと文体や語の選択の不適切さが目立つ。

専門のレポートの内容に目を通し、さらに日本語の表現までなおすのは、大変な時間と労力がかか

る。専門を同じくする学部生や大学院生に対して少人数の授業の中でなら教師と一対一で文章指導できようが、多人数の授業でそれをやるのは大変な負担がかかる。

要求されるレポートが専門的であれば、レポートの形式や表現もその分野に特有のものが要求される。しかし、それ以前に文章表現力が不足している場合、専門性を深める以前の問題として、レポートの内容が意味不明にならない程度の日本語の文章表現が書けなければならないのである。したがって、留学生対象の作文や日本人学生が大多数の学部学生対象の言語表現科目では、そのような文章表現力の養成、いわゆる「アカデミック・ライティング」の学習が期待されよう。

3. 授業概要

ここでは、筆者が行ってきた留学生対象と日本人学生対象の文章表現の授業を報告することを通して、抽象的に「大学での勉学に必要な文章表現力を養う」と言ってきたことの実態を具体的に示したい。特に、問題となるのは、日本語の文章表現そのものや文章表現の指導方法の他に、学習者のニーズ、学習環境である。

3.1 留学生対象の科目

(1) 「作文」

1) 授業期間

1997年4月～1998年3月、筑波大学、週1回1コマ75分授業、10週、ほぼ同じ内容の授業を1～3学期で3回実施

2) 対象

全学の留学生対象の日本語補講

3) 教材

自作教材、コピー教材

4) 授業内容

レポートや研究計画が書ける文章表現力を身につけることを目標とした。この授業では、受講者の過半数が専門の異なる研究生なので、専門性より一般的な文章表現力を意識して、学生が今まで学習した日本語を使ってレポートや研究計画を書くための文章表現力を学習することに重点をおいた。それぞれの専門でレポートの形式はかなり異なっているが、それらのレポートを書くための基礎となる文章力は同じであるという前提に立っている。

具体的には次の2つの内容を中心に、以下のような進め方と授業予定(3学期の例)で授業を行った。以下のものは授業で学生に配ったプリントの一部である。

例1 作文Ⅳのシラバスの一部

授業内容

- (1) レポートや研究計画作成の基礎となる文章作成練習をする
- (2) テーマを決めて、5ページのレポートを書く

授業の進め方

- A.【宿題提出】前回の宿題を出す
- B.【宿題添削】前々回の宿題を返してもらい、自分の書いた文章を見直し、注意すべきことを確認する
宿題として書いた文章(書いた人の名前は出しません)を授業でみんなと一っしょに書き直すことがあります
- C.【講義・作文】その日の内容について学習し、文章を書く
時間内に書けなかったら宿題になります

授業予定

- (1) 12 / 9 オリエンテーション、要約文、メモの書き方、(研究計画書)
- (2) 12 / 16 要約文、いろいろな段落
- (3) 1 / 13 文章構成(1)
- (4) 1 / 20 文章構成(2)
- (5) 1 / 27 引用・参考文献の書き方
- (6) 2 / 3 図表・グラフの説明
- (7) 2 / 10 レポートの表現
- (8) 2 / 17 メモ・手紙の書き方
- (9) 2 / 24 学期末レポートについての相談(個人別)
- (10) 3 / 3 学期末レポート提出、レポートの要約を書いて提出

5) 授業のコメント

文章表現力の2つの面

上の「文章構成(1)(2)」と学期末レポートでは章立てをするよう指導した。その指導の通りに書いたレポートの場合は、文章全体の流れがはっきりしており、内容もわかりやすく書かれていた。一方、章立てをするよう指定したにもかかわらず、章立てをせず書いて提出されたレポートは文章全体の流れもあいまいで、内容も感想文のようでレポートとしては認められないものであった。

しかし、章立てしているレポートも章立てしていないレポートも、日本語の文法や語の使い方、文を連ねて文章にしていくことのような、いわゆる日本語表現力に関しては、章立ての有無は関係なかった。

以上のことから、日本語の文章表現力には、伝えたいことを日本語で書くことと、文章全体を目的にあった文章に編集することの両面があると言える。前者は日本語の文法や語彙を組み合わせる文を書いて文章にしていく力で、後者は文章全体の構成といった内容に関わる部分と、書式やレイアウトといった形式に関わる部分を整えて、目的にふさわしい文章にする力である。

特に、後者の編集する技術を教えるというのは、文章表現教育にとって重要なことではないかと思う。段落を分けて文章を書くというのはどの教科書でもだいたい書いてある。しかし、章立てをどんな内容でどんな順番するかを詳しく説明した教科書はあまり見かけない。

専門性の問題

この授業では、専門のテーマなら長い文章が書けるが、一般的なテーマでは書きづらいという学生がいた。そこで、教師がその専門の内容がわからないので評価が不十分になるかもしれないと断った上で、テーマを本人の専門のことに変えた。

専門性については文章表現を教える教師側の問題がある。教師の問題としては、日本語の教員が教えるのか、専門の教員が教えるのかによって、教える内容が異なる。学生と専門が異なる教師が文章表現を教える場合、内容の深いところまでわからないため、結果として文章表現も直せないという問題がある。

では、専門外の教員だと文章表現が指導できないかということ、むしろ日本語そのものに集中できるという利点もあった。例えば、筆者がかつて学部生の専門科目を教えた際、留学生のレポートの日本語の誤りを見つけてもだいたいの内容がわかればよしとすることが多かった。というのは、レポートはまず第一に内容について評価するので、多少日本語の文章に問題があっても意味が通じればよいとのことからである。

大学院レベルの留学生と学部レベルの留学生の差

大学院レベルの留学生（大学院正規生、研究生）と学部レベルの留学生の差に関係する場合がある。つまり、一般に、大学院レベルの留学生は、広範な知識があり、思考力・分析力・調査力などはすでに持っている場合が多いという印象を受ける。一方、学部生レベルの留学生の中には、一般的な知識や思考力などはまだ不足している者も見られる。したがって、大学院生レベルの留学生なら日本語の表現さえ身につければ、内容のある文章が書けることが多い。しかし、学部生レベルの留学生だと日本語の表現だけでは中身の薄い文章しか書けない場合がある。そこで、学部生レベルの留学生に対しては、内容についての検討をしたり資料を集めて分析したりすることも含めて文章表現を指導することを考える必要があった。

母語の文章と日本語の文章の発想の違い

日本語の文章の発想に関わる問題もある。レポートと文章構成と章立ての説明を行ったとき、「今後の課題」で締めくくると言ったところ、今後の課題は書かないという学生がいた。国で大学を卒業した学生は、文章構成や章立ては日本語と同じでも、その中に書く内容は国とは異なっている場合がある。

対人関係に関わる文章表現の必要性

手紙やメモ、電話のメッセージを指導した際、きちんと書ける学生は少なかった。手紙の書式や敬語の使い方を知らないことのほかに、内容の問題が大きい。書かないほうがいい内容を書いてしまうのである。失礼な印象を与える可能性が予想できず、母語の感覚で書いているためと思われる。手紙

などの書式を教えるだけでなく、場面を考慮して、書く内容、書く順序、敬語等の表現、日付や名前を書く位置といったレイアウトなどを含めて指導する必要がある。参考までに、筆者の自作教材を下に挙げる。

例2 自作教材「メモと手紙」

メモと手紙

A. メモ

- 問1 提出するレポートにつけるメモを書いてください。
- 問2 遅れて出した宿題につけるメモを書いてください。
- 問3 先生と研究室会う約束をしていましたが、急用で行けなくなりました。お詫びのメモを書いてください。また、書いたメモはどこに置いていったらいいでしょうか。
- 問4 同級生に借りた本を返したいのですが、これから東京に行くので会えません。その同級生の友達に本を返すのをお願いします。返す本につけるお礼のメモを書いてください。

B. 手紙

- 問1 急に国に帰らなくてはいけなくなりました。指導教官の先生に連絡が取れず、空港で手紙を書いて先生に出すことにしました。先生への手紙を書いてください。
- 問2 冬休みにホームステイをします。ホームステイでお世話になる家族にあいさつの手紙を書いてください。ホームステイの家族は、両親と10歳の女の子の3人家族で、横浜に住んでいます。
- 問3 ホームステイをした家族に写真を送ります。写真と同封する手紙を書いてください。
- 問4 旅行先で知り合った人に写真を送ってもらいました。お礼のはがきを書いてください。どこに旅行したか、知り合った人はどんな人かは自分で考えてください。

文章表現はあるひとまとまりの内容を伝えるために必要なものであるとすれば、書き言葉を通してやりとりする場合と、話し言葉を通してやりとりする場合があると言える。この授業では書き言葉のみを取り上げたが、上の「メモと手紙」の課題は、電話したり会って口頭で話したりする場合もある。また、同じ書き言葉でも、ファックスや電子メールで伝える場合もある。単なる手紙の書き方、メールの書き方、電話のしかたではなく、どんな時にはどの媒介が適切かを選べるように、さらに詳しくいろいろな場面設定でこのような課題をすることもできよう。

(2)「理B3(文章表現)」

1) 授業期間

1993年4月～1994年1月、早稲田大学、週1回1コマ90分授業、30週

2) 対象

理工学部正規生のための日本語補講

3) 教材

「理工学を学ぶ人のための『科学技術日本語案内』」(山崎信寿・富田豊・平林義彰・羽田野洋子、創拓社、1992年)の一部、新聞・雑誌記事のコピー教材

4) 授業内容

レポートを書いたり授業で発表したりするために必要な表現力の基礎を学ぶことを目標とした。授業では、科学技術日本語の教科書に基づいてレポートを書くときによく使う表現について説明し、毎回、作文を課し、その訂正、添削をした。作文の題材は、新聞記事や雑誌記事から選び、なるべく科学技術に関連したものを取り上げるようにした。また、科学技術に限らず自分の関心のある話題について口頭発表する練習もした。作文の総まとめとして数ページに及ぶ学期末レポートを課した。レポートの準備に6週をかけ、下のような作業予定に従って行った。

例3 「理B3(文章表現)」の課題レポートの作業予定

課題レポートの作業予定		
[授業]	[宿題]	[提出物]
11/18 選んだ文章のアウトラインを作成する レポートのアウトラインを作成する		自分が選んだ文章 (2部、自分用と教師用) 文章のアウトライン レポートのアウトライン
11/25 下書きをする		下書き
12/2 レポートの表現上の注意	下書き	
12/9 下書きを修正し清書する	清書	
12/16 清書		清書(締切期限12/31、1部 北へして自分用に持っておく)
1/13 発表会(一人5分)		

5) 授業のコメント

学生のニーズと授業内容とのずれ

工学部の学部正規生の留学生対象のこの授業を担当し、大学での勉学に必要な日本語教育の再検討を考えさせられた。学生は実験レポートは書けていたし、またそれは研究室や先輩後輩のつながりの中で学んでいたようだ。理科系、科学技術日本語を意識して教材を選んだが、学生の選んだ期末レポートのテーマは経済発展や社会問題、教育問題などで、結果的には科学技術日本語以外の内容になった。

学生は専門に直接むすびつく日本語だけが必要なのではない。大学でレポートが書けることは確かに重要ではある。しかし、手紙や伝言メモが適切に書けること、新聞など日常生活で接する文章表現に慣れることなども学生には必要なのである。

(3) 「日本語作文Ⅱ-1」

1) 授業期間

1999年4月～6月、筑波大学、週1回1コマ75分授業、10週

2) 対象

学部留学生(正規生・短期留学生)・帰国子女の学生のための日本語日本事情

3) 教材

自作教材、コピー教材

4) 授業内容

「作文」と同じく、専門性より一般的な文章表現力を重視した。しかし、大学院の研究生・正規生の多い「作文」とは異なり、内容や話題の広がりを意識した。「作文」の受講者は内容は母語である程度わかっているが、日本語力が足りずに表現できない場合が多かった。しかし、受講生には、日本語を通して未知の情報に接したり、いろいろな考え方を学んだりする段階も必要だった。そのため、日本語の文章表現を学ぶとともに、調査や話し合いによって考えを深めることも重要になる。さらに、意見であれ説明であれ公に発信できる文章を書くという動機付けのためインターネットを利用することにした。

学生には教師に授業日記を電子メールで送ること、書いた作文はフロッピーディスクで提出し、作文は教師のホームページに載せてお互いに見ることができるようにした。以下、授業シラバスの一部を紹介する。

例4 日本語作文Ⅱ-1のシラバスの一部

授業目的

(1) 「仕事」の文章が書けるようになる

報告するレポート、検証するレポート、主張して提案するレポートを書く。
レポートの文章構成、レポートを書くのに役立つ表現を学ぶ。

(2) 作文にコンピュータを活用できるようになる

ワープロの使い方(キーボードの打ち方、テキストファイル形式で保存する方法、ワープロ文書の作成)、電子メールの書き方、インターネット検索の仕方を学ぶ。

授業に必ず持ってくるもの

(1) フロッピーディスク1枚(Windows95でフォーマットする)

自分の作文は、かならずテキストファイル形式(ファイル名.txt)で保存する。

(2) 辞書

使い慣れたものならどんな辞書でもいい。

(3) 教材

プリント教材を授業で配る。

宿題

- (1) レポート、レポートに関係する提出物(調べてきた資料など)
- (2) 自分の授業日記

授業日記をワープロで書いて、次の授業までに電子メールで教師に送る。

書く内容 日時・授業内容・宿題・コメント

授業のホームページについて

この授業の完成レポートは私のホームページ「風来坊通信」に載せて公開する予定である。自分の作品を公開することによって、自分の書いた文章に責任を持つことを学んでほしい。

<http://www03.u-page.so-net.ne.jp/td5/kidomi/>

「風来坊通信」「授業のドア」「日本語作文 -1(1999年1学期)」のページ

<公開する時の注意>

- (1) ペンネームか実名かは自分で決めること。
- (2) 一度ホームページに載せた文章でも、書き直して新たなものに差し替えてよい。
文章のはじめに差し替えた日付を「年 月 日更新」と必ず入れること。

授業予定

(作文)	(コンピュータ)	(テスト・レポート)
4 / 13 オリエンテーション 意見を書く 添削		
	インターネット検索	

< A. 報告の文章 >

4 / 20 事実を調べて報告する(1)	ワープロ
4 / 27 事実を調べて報告する(2)	ワープロ
5 / 11 批評会(1) 書き直す	

< B. 検証の文章 >

5 / 18 事実を検証する(1)		テスト(1) Aのレポートを出す
5 / 25 意見を検証する(2)	電子メール	
6 / 1 批評会(2) 書き直す		

< C. 意見・提案の文章 >

6 / 8 意見を述べて提案する(1)		テスト(2) Bのレポートを出す
6 / 15 意見を述べて提案する(2)		
6 / 29 批評会(3) 書き直す		テスト(3)
7 / 2 (金)締め切り		Cのレポートを出す

5) 授業のコメント

ホームページ公開の文章

「わかった」「わからなかった」で終わる単なる感想文でない文章を書くことをめざして、公に読むに耐えうる文章を書かせる目的で、課題文章のホームページ公開を行った。受講者ははじめからテーマごとの作文がホームページで公開されることがわかっていたためか、提出されたレポートはどれも公開にふさわしい文体・内容であった。

しかし一方で、課題提出が遅れがちな学生や学期末レポート提出をあきらめた学生もいた。学生によっては課題をこなすのにはかなりの負担を感じたようだ。文章作成にある種の緊張感がある一方で、その緊張感が文章を書きづらくする恐れもある。

電子メールの授業日記がオフィスアワーの役割を果たすこと

はじめは事実を書く練習の一つとして「である体」で授業日記を書いて電子メールで送ることを課した。途中から一部の学生の要望もあって、授業の記録より学生の意見や感想などが多くなった。結果として、作文や日本語などについての感想が多くなり、教師としても授業外での個人的なやりとりをすることで、学生の様子をより詳しく知ることができた。授業外に行うオフィスアワーと同じ役割を電子メールが果たすこととなった。

ただし、学生によっては授業の記録だけしか書いてこない者もいる。したがって、全ての学生にこのやり方が有効だとは限らないようである。また、学生数が多いと時間と手間がかかってしまうこともある。しかし、オフィスアワーなどと併用することで授業ではなかなかできない個人への手当てができる。

大学のコンピュータ使用環境の問題

学生の所属によってコンピュータ使用環境が同じ学内でも相当異なることがわかった。理系の学生だと学部内でコンピュータが使用しやすいのに対し、文系の学生だと図書館などごく一部でしかコンピュータが使用できる場所がないようだった。さらに、この年はたまたまメールアドレスをもらう手続きが変わったらしく、4月の段階で担当部署に問い合わせたところ、書類の形式がまだ決まっていないから新入生にメールアドレスをつくれぬと言われていた。学生の中には hotmail のような無料サービスを利用してメールアドレスを手に入れて電子メールの送受信をしている者もいた。ところが、hotmail で漢字かな混じり文が送受信できるようになったのは最近のことだそうで、そのためなのか文字化けがひどく、せっかく送られてきた授業記録も解読不可能なことも多かった。

余談だが、筆者が数年前に滞在した、米国のニューメキシコ大学やコーネル大学では、夏の間の1ヶ月の滞在であっても、コンピューターセンターに行けばその場でメールアドレスも作ってもらえた。メールもインターネットも無料で、使えるコンピューター室も学内に数カ所あった。また、1枚の紙にコンピューター室についての情報がまとめられているのをもらった。どこのコンピューター室が何日の何時から何時まで使えるか、どんな機種 of コンピューターが何台あるかも書いてあり、非常に便利だった。日本の大学でも、一部の専門の学部だけでなく、全学的なコンピュータ環境の整備は早急に

進めてほしいものである。

3.2 学部生対象の科目

(4)「国語表現法」

1) 授業期間

1994年4月～1995年1月、女子聖学院短期大学、週1回1コマ90分授業、計30週

2) 対象

国文科学生のための文章表現

3) 教材

『実践・言語技術入門』（言語技術の会編、朝日新聞社、1990年）、『ケーススタディ 日本語の文章・談話』（寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編、おうふう、1990年）

4) 授業内容

事実や意見を的確に相手に伝えるために知っておきたい表現の基本事項を学ぶことを目標とした。授業内容は、講義・作文練習・1分間スピーチの3つを中心にした。前期は作文練習中心、後期は文章表現に関する講義中心に進め、1分間スピーチは前後期を通して行った。

例5 「国語表現法」のシラバスの一部

授業内容

- (1) 講義：表現に関わる基本事項（表記、文法、文章構成など）について教科書を参照しながら説明する。
- (2) 作文練習：短文の作文から文章の作文まで実際に書くことを通して表現の力を養う。
- (3) 1分間スピーチ：私的な場ではなく公の場で人前で話す練習をする。
一人2回くらい当たる予定。

授業予定

前期：

（教科書1『実践・言語技術入門』）

- 4 / 1 1 話す、第四章 スピーチ - 1分間スピーチの実践
- 4 / 1 8 話す、第四章 スピーチ - 1分間スピーチの実践 続き
- 書く、第一章 何を書くか、何を捨てるか
- 4 / 2 5 書く、第二章 「事実」か「意見」かしっかり区別しよう
- 5 / 9 書く、第二章 「事実」か「意見」かしっかり区別しよう 続き
- 5 / 1 6 書く、第三章 段落を見直そう
- 5 / 2 3 書く、第三章 段落を見直そう 続き
- 5 / 3 0 書く、第四章 重点先行で書こう
- 6 / 6 書く、第四章 重点先行で書こう 続き
- 6 / 1 3 書く、第五章 わかりにくい文

6 / 2 0	I 書く、第五章 わかりにくい文 続き
6 / 2 7	書く、第二章 電話と手紙
7 / 1 2	書く、第二章 電話と手紙 続き

後期：

	(教科書 2 『ケーススタディ 日本語の文章・談話』)	(レポート)
1 0 / 1 7	1、2 接続表現 (1)(2)	テーマを決める
1 0 / 2 4	3 指示表現、4 反復と省略の表現	資料を探す
1 1 / 7	5 提題表現、6 叙述表現	テーマを検討する
1 1 / 1 4	1 3 文体と表現	資料を検討する
1 1 / 2 1	1 4 比喻表現	レポートの構成を考える
1 1 / 2 8	9 文章と談話のあいだ	レポートの構成を検討する
1 2 / 5	1 0 対話のなりたち	レポートの下書きをする
1 2 / 1 2	1 1 会話の展開	レポートを書き直す
1 / 9	1 2 発話の機能	レポート提出

5) 授業のコメント

1 分間スピーチで同じ内容を書く・話すことの効用

授業のはじめに5人ぐらいにテーマ自由で1分間スピーチを課した。原稿を必ず書き、スピーチ終了後提出させた。同じ内容を文章で書いたりスピーチで話したりすることにより、話し言葉・書き言葉、フォーマルな文体・インフォーマルな文体の違いを意識するようになった。これは作文にもよい影響を及ぼした。書くだけ、話すだけではわからないことが両方することにより実感しやすいようだった。

終わってすぐに一人ずつ講評して、よかったところ・改善してほしいところを指摘した。すると、次のスピーカーは前回の人と同じ間違いはしない。同じように1分間スピーチを「理B3(文章表現)」のような留学生の授業でしたときは、前回の人と同じ間違いをする学生が多く、改善に時間がかかった。互いの発表によって学び合うといっても、日本語母語話者と日本語学習者では気づきや改善の速さにかなり違いがある。

文章のいくつかの可能性を教えることの重要性

教科書はだいたい妥当な選択だったと思う。しかし、教科書概念の「重点先行」「中心文」「事実か意見か」「道順の説明」では、具体的な文章表現に当てはめると必ずしもうまくいかない、または、かなりの補足説明が必要なことがあった。

「重点先行」では、例はあるが、どんな条件のときどんな順番で書くか、話すかといったより具体的な指針が必要であった。「道順の説明」では教科書の説明通りに地図を書こうと思っても書けなかった。また、道順を尋ねた人がどんな人が(その町のことをまったく知らない人か、ある程度わかるか、歩くのが大変なお年寄りか、など)といった条件によって、適切な「道順の説明」が変わって

くるからである。土地勘のない人なら多少遠回りでも曲がり角の少ない道のほうがいいし、歩くのが大変なお年寄りならバスに乗ったほうがいいわけである。

特に実用的な場面に要求される文章表現は、言葉だけで説明する文章を考えるだけでは不十分である。

もう一つ例をあげる。「事実か意見か」の区別をつけて書くところがあるが、要求される文章の種類や聞き手によって、事実を意見の色づけをしながら書くことが必要な場合もある。例えば、説得するための意見文で、数値を「 % あった。」というより、「 % しかない。」というほうが書き手がその数値をどう見ているかが伝わりやすいのではないか。前者のタイプの文だけを事実で連ねられたら、単調すぎて、いったい書き手はこんなに数値をあげて何をいいたいのか、と聞き手が疑問に思う場合もあるだろう。聞き手によっては途中で読むのをやめるかもしれない。

教育的な効果を考えると、少数のモデルとなる型を教えたほうが基本的なことが身に付くと思う。その上で、いろいろな条件によって可能な文章表現が変わることを実感させ、条件に応じて使い分けができるようになるのがよいのではないか。

4 . これからの文章表現教育のために

以上4つの授業報告の概要とコメントを紹介した。今後の課題として以下簡単に述べる。

文章展開の可能性とその動機付けの研究の必要性

留学生・日本人学生対象を問わず、同じ種類の文章表現でも聞き手や場面などによって複数の可能性がある。なぜそのような文章展開にしたほうがいいのかといった文章展開のバリエーションの研究が必要である。将来はそのような研究に基づいた教科書も必要であろう。

方法論と結びついた文章表現力養成

一般的なことでも、専門的なことでも章立ての指導をしたほうがよい。文章構造が現代科学の方法論を反映しているとの指摘がある⁽²⁾が、章立ても同じくその分野での方法論を反映していると言えよう。ただし、一般的なことについて調査・分析・考察する方法論と専門分野別の方法論は区別して考えたほうがよいかもしれない。

社会生活の中で必要な文章表現力の養成

大学での勉学に必要な文章表現力、会話力には、専門のレポートを書くだけでなく、大学という社会の中で生活する上で要求されるものも含まれる。例えば、何か専門的なアドバイスについて他大学の人から情報を得たいと思えば、依頼の手紙を書きだそう。返事が来たら、お礼の手紙を書くが、ハガキ、ファックス、電子メール、電話のどれがいいか、どの媒体ではどんな表現力が必要か、などが問題になる。

大学として系統立ったカリキュラムの必要性

「この文章表現のコースを終えたら何ができるようになるのか」この大学のこの課程を終えたら何

ができるようになるのか」を留学生対象・日本人学生対象などの授業についてもっと明確に位置づける必要がある。学んだ内容が複数の授業で重複することのないように、また、難易や専門別などの段階ごとに系統立てて、それぞれの文章表現のコースの位置づけが大学課程内でなされることが重要である。

コンピュータ環境の整備

コンピュータ・リテラシーはこれからの大学生活では必要不可欠である。そのためには、特定の学部の学生のみでなく全学生に開放されたコンピュータ室の増設など、全学生が利用しやすいコンピュータ環境の整備が必要である。

注

- (1)筑波大学では「学部」ではなく「学類」と言うが、大学院生でない学部生という意味では「学類生」も「学部生」と同じなので、本稿では一括して「学部生」とする。
- (2)樺島忠夫氏の指摘。1999年6月26日に昭和女子大学で行われた(社)国際日本語普及協会(AJALT)主催「文章の組立てと表現を考える」『第15回 日本語教師のための公開研修講座 中・上級指導のために - 文章・談話を構築する』における講演。